Japan Society of Obstetrics and Gynecology

20-3 当院での子宮体癌の予後と病理診断

広島市立広島市民病院
橋本一郎，杉山友香，笏本朱理，楠本知行，小坂由紀子，吉田 孝，伊藤裕徳，野間 純，吉田信隆

【目的】子宮体癌は未だ手術術式や術後後療法の適応などに統一された見解はない．そこで当院での子宮体癌症例を検討し今後の診断・治療方針決定の一助とする事を目的とする．【方法】1995年1月より2002年12月の8年間に当院にて初回治療を受けた子宮体癌144例(1期106例・2期14例・3期17例・4期7例，患者平均年齢57.9歳，組織型は類内膜癌が88%)の病理診断について検討した．【成績】初回内膜細胞診は21.0%が陰性で組織診の5.6%と比べ偽陽性率が高かった．摘出子宮のリンパ管侵襲(静脈侵襲と区別)，子宮筋層浸潤の程度，Grade，術中腹腔内細胞診とリンパ節転移の有無・予後との関係等を検討するとリンパ節廓清を行った65例でリンパ管侵襲は静脈侵襲に比べリンパ節転移と強く相関していた($p<0.0001$)．筋層浸潤の程度はリンパ節転移の有無($p=0.169$)・予後($p=0.0005$)と相関していた．Grade は1-2期で予後に影響せず，リンパ節転移の有無とも相関しなかった($p=0.6179$)．腹腔内細胞診陽性17例(3A 期10例・3C 期3例・4期4例)中7例が病死し(2例は筋層浸潤無し)，死因は骨盤・腹腔内転移が6例だった．【結論】内膜細胞診のみの診断は偽陰性率が高く性器出血・超音波検査異常等が認められる症例は積極的に組織診を行うべきと思われた．リンパ管浸潤・筋層浸潤はリンパ節転移の有無の予測と後療法判断の一助となると思われた．Grade のみでは術後の後療法の指標とならないと思われた．腹腔洗浄細胞診陽性例では腹腔内播種による再発に注意を要すと思われた．

20-4 子宮体癌における臨床的および病理学的因子による予後の予測

医療法人鉄蕉会亀田メディカルセンター[1]，東京医歯大生殖機能協関学[2]
大塚伊佐夫[1]，宇野雅哉[1]，久保田俊郎[2]，清水幸子[1]，亀田省吾[1]，麻生武志[2]

【目的】子宮体癌の予後を予測する上での臨床的および病理学的因子の有用性を評価すること．【方法】術前に CA125を測定し，また手術中にリンパ節摘出を施行した I～III 期の子宮体癌，類内膜癌164例を対象とした．類内膜癌以外の症例および卵巣・卵管癌合併例は除外した．臨床的因子として高齢(65歳以上)，未産，肥満(BMI 30以上)，治療前 CA125値(cut off 値：閉経前35U/ml，閉経後20U/ml)について，また病理学的因子として分化度，リンパ節転移，リンパ節以外の子宮外病変について，それぞれ生存期間におよぼす影響を検討した．観察期間の中央値は69カ月であった．生存曲線は Kaplan-Meier 法を用いて算出し logrank 法により比較し，また多変量解析には Cox の比例ハザード法を用いた．【成績】単変量解析では，臨床的因子として治療前 CA125高値($P<0.0001$)，高齢($P=0.01$)が生存率低下と関連する有意な因子であり，未産例は予後良好な傾向が見られた($P=0.08$)．病理的因子は分化度(G1 vs G2/3,$P<0.001$)，リンパ節転移($P<0.0001$)，リンパ節以外の子宮外病変($P<0.0001$)の3つとも有意であった．単変量解析で有意であった5因子を用いた多変量解析では，リンパ節転移のみが有意な($P<0.05$)因子であった．【結論】術前 CA125の高値および65歳以上の高齢は予後不良因子であり，また未産例は予後良好な傾向が見られた．術前あるいは術後に検討される臨床的および病理学的因子では，リンパ節転移の有無が最も予後と関連することから，子宮体癌の手術時にはリンパ節摘出を行うことが予後を予測し，適切な術後治療を行うために必要である．

20-5 子宮体部漿液性腺癌と漿液性腺癌を部分的に含む子宮体癌の予後の比較検討

癌研究会附属病院
川又靖貴，平井康夫，竹島信宏，荷見勝彦

【目的】子宮体癌の漿液性腺癌(serous；s)は，子宮筋層のリンパ管，血管に侵襲し早期に広範囲な広がりを見せるため，その予後は不良である．一方，漿液性腺癌成分を部分的に含む子宮体癌(partial serous；ps)の臨床像は多様で，その予後に関して漿液性腺癌と比較検討された報告は少ない．今回我々は，serous と partial serous の予後を比較検討したので報告する．【方法】1970年から1994年まで当科で初回治療を行った子宮体癌のうち，漿液性腺癌(serous)21例，漿液性腺癌成分を部分的に含む子宮体癌(partial serous)15例を対象に retrospective に予後を検討した．生存者の追跡期間の中央値は，69月(5.7年)〔0.9月～164月(13.7年)〕であった．生存曲線は Kaplan-Meier 法によって計算し，Logrank-test, Wilcoxon-test によって比較した．また，比例ハザードモデルにより，多変量解析を施行した．p 値は0.05以下を有意とした．【成績】漿液性腺癌(serous)と部分的な漿液性腺癌(partial serous)との組織型による生存期間との相関は，有意差を認めなかった(p(Logrank-test/Wilcpxpn-test)=(0.152/0.104))．また，組織型を因子とした多変量解析では，生存期間に対する有意な独立因子ではなかった($p=0.156$リスク比；0.603 95%C.I.；0.299-1.204)．【結論】漿液性腺癌(serous)と部分的な漿液性腺癌(partial serous)では，生存期間に対する有意な差は認められなかったが，partial serous の方が serous より予後が良好な傾向が推測された．今後対象症例を増やし詳細な解析を行っていく予定である．

NII-Electronic Library Service